

李白の「黄鶴樓送孟浩然之廣陵」について

中田伸一

一、問題の所在

王琦の『李太白文集』には孟浩然を詠んだ詩が三首収められている。「黄鶴樓送孟浩然之廣陵」(卷十五)「贈孟浩然」(卷九)「春日歸山寄孟浩然」(卷十四)がそれである。一方、孟浩然の詩集には李白に触れた作品は見当らない。現存する作品が李白の側の三首に限られることは、両詩人の交流を跡づけることを極めて難しくしている。それらの作られた時期についても同様である。例えば、李白の詩文の編年を試みた王琦、黄錫珪、詹鏜の三氏の所説を対比してみよう。次のような開きがある。

	王 琦	黄 錫 珪	詹 鏜
黄鶴樓送孟浩然之廣陵	開元二十八年(七四〇)以前	開元二十五年(七三七)	開元十六年(七二八)以前
贈孟浩然	開元二十八年(七四〇)以前	開元二十一年(七三三)	開元二十七年(七三九)
春日歸山寄孟浩然	開元二十八年(七四〇)以前		開元二十七年(七三九)

本稿で中心的にとりあげる「黄鶴樓送孟浩然之廣陵」についてみると、王琦説では李白四十歳以前の作、黄錫珪説では三十七歳のときの作、詹鏜説では二十八歳以前の作ということになる。これだけの開きがあるのも、両者の交流を跡づける資料の乏しいのが第一の理由である。

最近、中国では詹鏜の業績に沿って製作時期を特定した研究が発表されているが、なお細部については牽強付会もあり、説得力を欠くように思われる。「黄鶴樓送孟浩然之廣陵」がいつ作られたかは、どこで作られたかと合わせ、未解決の問題といえよう。

この詩は本文にも不確かな点がある。古来、李白の代表

的な七絶として、多くの選集に採られ愛唱されてきたが、一部にはなおすっきりとしない本文の異同がある。今、李白を読むとき標準的なテキストとされる、王琦の『李太白文集』を引く。

故人西辭黃鶴樓 烟花三月下揚州 孤帆遠影（一作映）

碧山（蕭本作空）盡 唯見長江天際流

第三句に注目すれば、今日私たちのよく見る本文とは異なる。つまり「孤帆遠影碧空盡」となっていない。「碧山盡」か「碧空盡」か、解釈上この一文字の差異は大きい。ではなぜ、王琦の「碧山盡」でなく「碧空盡」をよしとするのか。その系統的な論証は管見の及ぶところ無い。ただ「碧空盡」の方が詩的にすぐれる、といった主観的論法が積み重ねられ、幅をきかせてきたように見うける。

本稿は「黃鶴樓送孟浩然之廣陵」の作られた時期と本文異同について、従来の曖昧な面を洗い正そうとするものである。

二、「春日歸山寄孟浩然」と「黃鶴樓送孟浩然

之廣陵」との関係

本論に入る前に、孟浩然にあてた他の二つの詩をみておきたい。以下、李白作品の本文は中華書局版『李太白全集』

による。

贈孟浩然 孟浩然に贈る

吾愛孟夫子 吾は愛す孟夫子

風流天下聞 風流天下に聞こゆ

紅顏棄軒冕 紅顏軒冕を棄て

白首臥松雲 白首松雲に臥す

醉月頻中聖 月に酔ひて頻りに聖に中り

迷花不事君 花に迷ひて君に事へず

高山安可仰 高山安んぞ仰ぐべけんや

徒此揖清芬 徒に此に清芬を揖す

この詩が作られた時期は既に示したとおりで、王琦は李白四十歳以前、黄錫珪は三十三歳、詹銜は三十九歳とする。三氏の説には開きがあるが、孟浩然の晩年を写した作品との認識では一致する。

一、二句目はおそらく、孟浩然が太一子という道士を訪問したときの作「尋天台山」の冒頭をふまえたものだろう。

吾愛太一子 餐霞臥赤城 ……

これも五言律詩である。陳賡焮は開元十八年（七三〇）ころの作と推定している。そのとおりとすれば、「贈孟浩然」の先行作品であり、李白が孟浩然の作品に目を通し学んで

いた傍証になるだろう。この作品は、十二歳年長の孟浩然への敬愛の情を格調高く吐露し、深く美しい交友を背後に想像させる。

もっともこの詩は、いつ、いかなる場での創作なのか、推測の手がかりを欠く。あるいは、兩人の相会う場での作品ではなかったかもしれない。その点次の詩には、創作した時と場を考える手がかりがある。

春日歸山寄孟浩然 春日歸山孟浩然に寄す

朱紱遺塵境

朱紱塵境に遺し

青山謁梵筵

青山梵筵に謁す

金繩開覺路

金繩覺路を開き

寶筏度迷川

寶筏迷川を渡る

嶺樹攢飛棋

嶺樹飛棋を攢め

岳花覆谷泉

岳花谷泉を覆ふ

塔形標海日

塔形海月に標はれ

樓勢出江烟

樓勢江烟を出づ

香氣三天下

香氣三天より下り

鐘聲萬壑連

鐘聲万壑に連なる

荷秋珠已滿

荷秋珠已に満ち

松密蓋初圓

松密蓋初めて円かなり

鳥聚疑聞法

鳥聚まりて法を聞くかと疑はれ

龍參若護禪 竜參じて禪を護るがごとし

媿非流水韻 媿づ流水の韻に非ざるに

叨入伯牙絃 叨りに伯牙の絃に入るを

この詩はかつて、孟浩然に寄せたものであることを疑われた。しかし私は、大野実之助が『李太白詩歌全解』で、詹鍈が『李白詩文繫年』で偽作説を否定している、その見方をとる。思うにこの詩は、李白が孟浩然に対して精一杯挨拶の意をこめ、孟浩然の詠風に近づけたものであろう。鈴木修次の「孟浩然論」に次のような指摘がある。

「香氣」「鐘聲」、その対応は、孟浩然がおいと音とを好んだことを心得ているものである。「三天」、仏教でいう欲界・色界・無色界の三をいうか。あるいは道教でいう玉清・上清・太清の三つの天上世界をいうか。いずれにせよ、孟浩然が、寺院や道観の雰囲気を好んだことにちなんでいったものである。「荷秋珠已滿、松密蓋初圓」の対句は、孟浩然が謝靈運ふうのきめのこまかい対応を好んだことを知っていて、孟浩然の好みにあわせるべく、李白にとってはいささか不得意な対句を試みたと考えられる。(中略) 孟浩然の好みの方向において、これだけの詩を作る李白は、孟浩然の詩風を十分にのみこんでいるとしなければならない。(『唐代詩人論』)

李白の周到な用意を教えられる卓説である。後の拙論の関連で言えば、仏教は二人の精神的紐帯であったか。詩に詠みこまれた寺院は李白だけでなく、孟浩然にもゆかりの寺院かもしれない。李白の配慮は表現だけに止まらず、内容や場にも及び、全体として孟浩然への周到な挨拶になっているように、私には思われる。

この詩の作られた背景については、郁賢皓が「李白与浩然交游考」⁽²⁾のなかで論述しているが、詹鍇の説の敷衍にすぎず、説得力のある根拠を伴うものではない。その結論の部分は、

今既知开元二十七年李白曾游巴陵、则可知李白游巴陵前后曾至襄阳、与孟浩然一起游山、才写了此诗。同时也写了《赠孟浩然》诗、对孟浩然「红颜弃轩冕、白首卧松云」的生活表示无限仰慕。按是年以后李白「学剑来山东」、再也没有机会与孟浩然见面。次年、孟浩然即与世长辞。疑此二诗乃李白于开元二十七年往山东途中经襄阳、与孟浩然交游而作。

「贈孟浩然」と「春日歸山寄孟浩然」の一詩を一对にする根拠、同時期の作とする根拠が何ら示されていないことに注意されたい。

従来の説とは別に私は「春日歸山寄孟浩然」は「黃鶴樓

送孟浩然之廣陵」との関連でとらえることに興味を覚える。というのは、前者は黃鶴樓の近くで作られたのではないかと思われるからである。そう判断する根拠は次の四点である。

1 李白は黃鶴樓とは長江を隔てた対岸、漢陽の大別山（現在は龜山と称する）地区に逗留していた時期がある。

これは彼の作品によって裏付けられる。また、宋代以前ここに既に李白の祠があったと記録に見え、それは李白と漢陽の地縁を物語るものであろう。

2 当地には大別寺と称する寺が唐代に創建されたことが文献に見える。⁽⁶⁾陸游の『入蜀記』にも大別山には寺院があることが記されている。⁽⁷⁾ここは古くから寺院が置かれていた区域であった。

3 大別山には伯牙と鐘子期の、いわゆる「知音」の故事にゆかりのある古琴台がある。⁽⁸⁾詩の末二句「媿非流水韻叨入伯牙絃」はこの伝承を多分にふまえており、単なる観念的な付合の句ではあるまい。ここは李白だけでなく孟浩然にとっても親しい所であったと思われる。ちなみに孟浩然の故郷襄陽を流れる漢水が、長江に合流する町が漢陽で、すぐ西側に大別山があり古琴台がある。ここは江南に下る孟浩然にとっては中継地でもある。こうした背景を念

頭におくと「春日歸山寄孟浩然」は、大別山の寺院に出入りしていた李白が孟浩然に（おそらく襄陽にいたであろう彼に）宛てた、挨拶の詩としての趣がはっきり表れる。

4 詩中の第四句から第七句「嶺樹攢飛棋 岳花覆谷泉 塔形標海日 樓勢出江烟」は寺院における属目であろう。特に「樓勢出江烟」は、長江の川もやの上に顔をのぞかせた対岸の黃鶴樓の情景かと思われる。

以上、「春日歸山寄孟浩然」が黃鶴樓とは咫尺の間にある、大別山で作られた可能性を指摘したが、李白には明らかに大別山で詠んだ作品がある。

望黃鶴山⁹ 黃鶴山を望む

東望黃鶴山 東のかた黃鶴山を望めば

英雄半空出 英雄として半ば空に出づ

四面生白雲 四面白雲を生じ

中峰倚紅日 中峰紅日を倚す

（下略）

李白は、大別山のある漢陽と黃鶴樓のある武昌の間を、盛んに往復したふしがある。後に述べるように、漢陽には王という姓の飲み友達があった。詩の寄贈もしている。また、黃鶴樓ではたびたび友人の送別をしている。前述のように漢陽には李白の古い祠があった。その位置は郎官湖の

北側という。この湖、現在は涸れているが、李白が名づけ親だったという¹⁰。李白と漢陽、そして武昌とは浅からぬ因縁によって結ばれていたと言うことができよう。

この付近の逗留期間について、黃錫珪は開元十七年、李白三十歳の暮から春にかけてとし、詹銑は開元二十一年、李白三十四歳のこととしている。「春日歸山寄孟浩然」と「黃鶴樓送孟浩然之廣陵」の二詩が、共に右の期間に作られたと断言できないにしても、その可能性は高い。二つの詩が共に春季であることも留意すべき一致点である。孟浩然の当時の足どりが更にはっきりすれば、製作時期の特定も不可能ではない。

三 黃鶴樓と李白

清の顧景星によれば、黃鶴樓を有名にしたのは、唐の李白と崔顥の詩であるという¹¹。

黃鶴樓唐以前不甚著名、李白見崔詩擱筆、顥詩顥、而樓益顯。

「崔詩」とは崔顥の七律「黃鶴樓」。「李白見崔詩擱筆」とは、『唐詩記事』卷二十一に収められたエピソードである。世傳、太白云、眼前有景道不得、崔顥題詩在上頭、遂作鳳凰臺詩以較勝負。

同時代の孟浩然や王維にも黄鶴樓を詠みこんだ詩はあるが、作品の質と量から言えば、また話題性から言えば、顧景星の指摘のとおりであろう。

南宋の乾道六年（一一七〇）八月、陸游の『入蜀記』には、ここを訪れたときのことか記されているが、彼の興味は李白の当時の樓の所在であった。古老に尋ねてその位置を確かめたが、そこには李監が篆書で書いた石刻が残っているだけだったと記している。

陸游は、ここに立って眺めた対岸の近さを次のように言う。

二十八日、同章冠之秀才甫、登石鏡亭、訪黄鶴樓故址。

石鏡亭者、石城山一隅、正枕大江、其西與漢陽相對、止

隔一水、人物草木可數。

李白も、この川幅の狭さを詠んでいる。

誰道此水廣 狭如一匹練

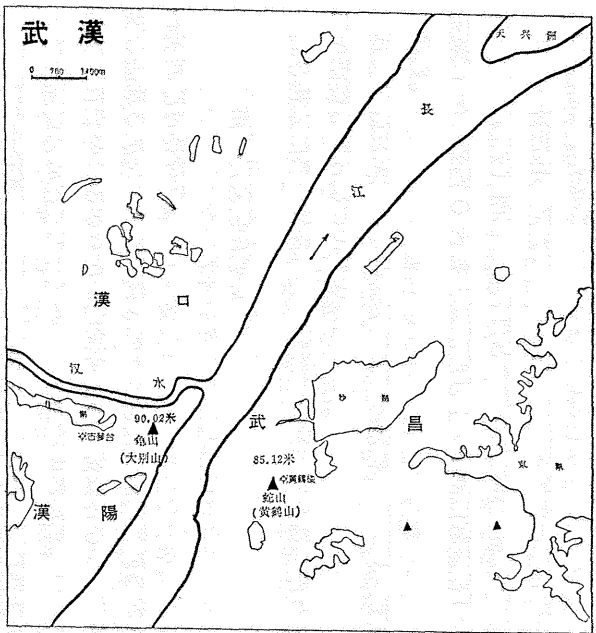
〔江夏寄漢陽輔錄事〕

この狭い水道には渡し舟が往復しており、李白も利用したらしいことは、詩により推測できる。

鸚鵡洲橫漢陽渡 水引寒烟沒江樹

南浦登樓不見君 君今罷官在何處

〔贈漢陽輔錄事二首〕其二



「漢陽渡」と「南浦」の位置について清の『一統志』はこう記す。

漢陽渡、在漢陽府東南、南浦在武昌城南三里。

右の図は、黄鶴樓周辺の略地図である。黄鶴樓の側、つまり蛇山（黄鶴山）から対岸を見ると、龜山（大別山）がそびえている。蛇山の標高は八五メートル、龜山は九十メ

ートルであるから、ほぼ同じ高さの小山が対峙する格好である。この間の長江の幅は約千メートル、くびれたように少し狭まる。二つの山が地形的にきわだつことを『湖北風物志』は「⁸亀蛇二山因兀立江头、拔地而起、氣勢雄浑、景色奇特而闻名于世」と紹介している。

いったいこの地域は、どのような魅力によって李白をひきつけたのか。考えられるいくつかを挙げてみる。

まず、ここは地形の変化や自然の風光に富む。黄鶴大別二山、長江、中洲、湖沼それに植生が加わり、四季の変化があつて、李白の詩心をそそつたであろう。黄鶴楼、古琴台、古刹、王廟、三國時代の遺址など歴史性にも富む。これは懐古の情をかきたて、自由な想像の飛翔を促したであろう。また、ここは漢水と長江の合流点であり、交通の要衝であつた。必然的に人と文化文物の交叉する十字路にもなる。とりわけ李白にとって重要な意味を持つと思われるのは、ここでは故郷の蜀とは長江によって結ばれている、という意識を持ちえたことではなかつたか。それは、次のような詩句に読みとれる。

我在巴東三峽時

西看明月憶峨眉

月出峨眉照滄海

與人萬里長相隨

黃鶴樓前月華白

此中忽見峨眉客

(峨眉山月歌送蜀僧晏入中京)

一忝青雲客 三登黃鶴樓 (中略)

江帶峨眉雪 川橫三峽流

(經亂離後天恩流夜郎憶舊遊書懷贈江夏韋太守良宰)

時代は隔るが、陸游の『入蜀記』には、蜀の出身者が多い旨書き留められている。

由江濱堤上還船、民居市肆、數里不絕、其閒復有巷陌、往來憧憧如織蓋、四方商賈所集、而蜀人爲多。

李白當時の蜀人の活発な往来があつたことを想定しても、あながち誤りではあるまい。

漢陽での交友も、ここでの彼の生活に潤いを与えたであろう。漢陽には王という姓の人物をはじめ、何人かの飲み友達がいいた。『全集』の卷十四「早春寄王漢陽」は王を飲酒に誘う詩であり、卷十四「寄王漢陽」は、酔後王に贈つたものである。

武昌と漢陽の間を往復して、一時期自由で楽しい交友のあつたことは、晩年になつても忘れ難い思い出となつたようである。その回想のなかに、黄鶴楼の現れる詩がある。

黃鶴西樓月

黃鶴西樓の月

長江萬里情

長江万里の情

春風三十度

春風三十度

空憶武昌城 空しく憶ふ武昌城

(一)送儲竄之武昌

樓の周辺の変化に富む豊饒な自然を背景に、伝説や歴史を秘めた江辺の町、故郷の蜀からの旅人も少なくない交易の町、ここで知友に恵まれ、仏教に親しむ生活を得たことは、李白にとって満足のいくものではなかったか。その居ごちのよさの証のように、回想の詩のなかで黄鶴樓は、なつかしさの象徴のように立っている。

四、「碧山盡」か「碧空盡」か

前述のように、この詩には本文の異同がある。『李白集校注』(瞿蜕園、朱金城校注)によって問題点を次に示す。
()内は筆者注。

〔碧山〕山、蕭本(元刊本分類補注李太白集)、郭本(明郭雲鵬重刊李太白文集)、胡本(清刊李詩通)俱作空。

王本(王琦輯注李太白文集)注云：蕭本作空。

〔孤帆〕此句敦煌殘卷(唐写本唐人選唐詩)作孤帆遠映綠山尽。兩宋本(北京図書館藏宋刊本李太白文集と静嘉堂藏宋刊本李太白文集)、繆本(繆曰芑刊本李太白文集)

王本影下俱注云：一作映。

なお、題にも本文異同があるが、これは末尾の注(14)に

付しておく。

結局、第三句には次の五種の本文が考えられる。ただし⑤は後に触れるが、陸游が『入蜀記』のなかに引用したもので、それがいかなるテキストに依るのか明らかでない。

①孤帆遠影碧山盡 王本 兩宋本 繆本 戚本⁽¹⁵⁾ 何校陸本⁽¹⁶⁾
黄校⁽¹⁷⁾

②孤帆遠映碧山盡 (孤帆)の項参照

③孤帆遠影碧空盡 蕭本 郭本 胡本

④孤帆遠映綠山盡 敦煌殘卷

⑤征帆遠映碧山盡 不明

問題点は三つある。第一点「孤帆」か「征帆」か。第二点「遠影」か「遠映」か。第三点「碧山盡」か「碧空盡」か、である。敦煌殘卷の扱いについては及びがたく、謎としておく。初めの問題については、現存する版本にもなく、またどの選集も本文に採っていないことよって問題にしない。

第三点については、「碧山盡」を採っているのは『全唐詩』、「碧空盡」を採っている選集は『唐詩別裁集』『唐詩訓解』『唐宋詩醇』『古唐詩合解』『唐詩解』などである。

「碧山盡」の代表的な支持者は陸游である。『入蜀記』の乾道六年八月二十八日の条にこう記している。

太白登此楼、送孟浩然詩云、征帆遠映碧山盡惟見長江天際流。蓋帆樯映遠山、尤可觀、非江行久、不能知也。

『入蜀記』は故郷の山陰（紹興）を出発して、赴任地の夔州へ至る旅日記である。長江を溯上しながら、行く先々での觀察や思考を記す態度は、事につき物に即している。「碧山盡」を肯定するのも、そうした実証的な判断に基づく。「非江行久不能知也」と言い放つあたり、体験から得た自信が読みとれ、言外に「碧空盡」を否定する語氣すらある。

これに反して、近代以降の注釈家は例外なく、陸游の指摘に冷淡である。

孤帆遠影碧空尽ヲ陸游ノ入蜀記ニ影ヲ映ニ作り、空ヲ山ニ作ルモ甚ダ珍ラン、王琦本モコレニ同ジ。

（市川寛齋『談唐詩選』）

征帆遠映というのは、字句が甚だ拙く、碧山ではさしもの長江が何だか広さを減ずるような感じがするから、矢張、ここに在る通り、孤帆遠影碧空尽の方が、はるかに面白く、放翁は、一時暗記の失を為して居たのであるう。

（久保天随『李太白詩集』）

恐らくは放翁が旅次倉卒の際、誤り引いたのであって、

唐詩選にある方が格調も高く意味も雋永で面白い。

（森槐南『唐詩選評釈』）

陸游説の否定者は必然的に「碧空」を支持する。その例二つを引く。

碧空は、青空。一本にはこれを碧山と作る。それならば緑の山のかなたに舟の帆かげが消えうせたことになる。碧空に作る方が、格調も高く、意味深遠であろう。

（高木正一『唐詩選』）

詩的第三句、在不同的版本中或作“碧空尽”、或作“碧山尽”。人们之所以多取前者，正是因为“空”字展开的境界更为阔大，而“山”字却阻断了人的视线，限制了望中的空间。相应地，“碧空尽”在人们心头引起的壮美感和向往之情也就显得更为强烈。

（安旗 薛天纬 阎琦『李诗咀华』）

「碧空盡」をよしとする論に共通するのは、主観的判断を決め手とし、創作の場や作者の視点からの考察を欠くことである。それらも考察に含めると、「碧空盡」を推すことがためられる事情が出てくる。結論から先に言えば、原詩では「碧山盡」であった可能性が高い。その根拠を次の四点にまとめてみた。

1 現存する李白の詩文の最古のテキストは、静嘉堂の藏

する宋本『李太白文集』三十卷である。これは平岡武夫氏の解説¹⁸⁾によれば「北宋の末か南宋の初めに、四川で、晏氏(晏処善)の蘇州における刊本を復刻したもので、今日ではやはり唐代に最も近いテキスト」という。この本の巻十三に詩の第三句は「孤帆遠影碧山盡」となっている。また、もう一つの定評のあるテキスト、清の王琦の『李太白文集』三十六巻もこれにならう。「碧空盡」を是とするのは、それらに異を唱えるわけだが、上述のように単に主観によるのでは独断にすぎよう。読み手の思惑と作者の表現とは別なのであって、「碧空盡」を是とする論には両者を混同している例が多い。

2 李白の詩歌中に「碧山」を含む用例は十八¹⁹⁾ある。一方、「碧空」は一例²⁰⁾しかない。李白は「あおい空」を「青天」とは言っても、「碧空」とは例外的に一箇所言うに止まる。この点、「あおい山」を「碧山」とか「青山」とか、時により使い分けると大いに異なる。言いかえると、「碧」と「空」とが結合するのは、李白の詩歌中では特異なケースなのである。だから「碧山」を「碧空」と置きかえることは、極めて確率の小さい選択肢を認めるということになる。

3 李白の「碧山」の使い方をみると、単に碧い山という

だけでない、ある種の気分や観念を伴っている。

① 覺時枕席非碧山 覺めし時枕席には碧山非ず

側身西望阻秦關 身を側て西のかた望めば秦関に阻まる

(鳴泉歌奉餞從翁清歸五崖山居)

② 鳥愛碧山遠 鳥は碧山の遠きを愛し

魚遊滄海深 魚は滄海の深きに遊ぶ

(留別王司馬嵩)

③ 問余何意棲碧山 余に問ふ何の意ありて碧山に棲むかと

笑而不答心自閑 笑って答へず心自ら閑なり

(山中問答)

④ 暮從碧山下 暮に碧山従り下れば

山月隨人歸 山月人に隨ひて帰る

(下終南山過斛斯山人宿置酒)

⑤ 湖闊數十里 湖闊きこと数十里

湖光搖碧山 湖光碧山に揺る

(陪從祖濟南太守泛鵝山湖三首)其二

⑥ 五月分五洲 五月五洲を分かち

碧山對青樓 碧山青樓に対す

(楚江黃龍磯南宴楊執戟治樓)

①②の「碧山」には慕わしいノスタルジアが漂い、③④の

「碧山」には、超俗的な生活を包みこむ自然な安らぎがあ

り、⑤⑥には、水面と対比される山の、戲狎的な趣がある。「孤帆遠影碧山盡」の「碧山」も、右にあげたような複数の情感を含むであろう。

前に述べたように、黄鶴樓の周辺には、作者が親和的に接した自然や生活があった。「碧山」は地理的には漢陽の大別山を指すにしても、当地への思い入れも含んで、幅のあるニュアンスを兼ね持つであろう。その点「碧空」は用例が一つしかないこともあり、そうしたニュアンスは託しえない。「碧山」はまことに、李白らしい含みを持つ語句といえよう。

4 改めて作者の視線を想定して詩を味わってみたい。第一句、故人西のかた黄鶴樓を辞し——作者はいま黄鶴樓のある武昌側にいる。目前には長江の黄濁した流れ、対岸には大別山。第二句、烟花三月揚州に下る——烟花を日本の注釈書のあるものは、花咲きかすむ情景としている。実際はそうではあるまい。視界を悪くする霞などかかっている。後半の表現が生動しない。花も山も春光の下に鮮かである。第三句、孤帆の遠影碧山尽き——帆をあげた船は流れに乗り遠ざかる、即ち「孤帆遠影」と共にいつしか視線は、漢陽側から漢口側に移っている。「碧山盡」は大別山の裾が江水に没するあたり一帯。また、漢水の河口に

もあたる。ここを通過すれば、空間的にも心理的にも隔絶された感じはつのである。そうした言外の情もにじませて「碧山盡」はすぐれた表現と言えよう。第四句、唯だ見る長江の天際に流るるを——故人を運び去った船影は視野のかなたに消え、天際に続く江水の果てを見るばかり。「天際流」が余情を広げるためにも、「天」と意味の重なる「碧空」が直前にあつては玉に瑕で、その点「碧山」には欠点がない。

五、観念としての「碧空盡」

海のような広がりをもつ長江のかなた、碧空に吸いこまれるように消えゆく孤帆の遠影に、古来あまたの注釈家が、送別詩の傑作と誉め称えた。私も小稿を構想する前は、何の疑念も持たず受け容れていたことである。だが調べていくにつれ、その先入観に疑いを持った。

いま私は次のように考えている。原作では「碧山盡」であった可能性が高い。だが人から人へ伝えられるうち、作者の創作の意図とは別に「碧空盡」はひとり歩きを始めた。これは読者の意図が原作中に紛れこんだのである。原作を最初に改めたのは誰か分からないが、それは十分な説得力をもってテキストのなかに居すわった。「空」の一文

字は、原作にも勝る魅力を表面的には備えていたのである。そして元の「碧山盡」の存在感を薄めてしまった。その意味では「碧山盡」は読者の観念が作り出した表現といえよう。あえていえばそうした観念がつきまとうこと自体、この詩の愛唱性を物語るのであるまいか。

〔注〕

- (1) 王琦の説は『李太白全集』卷三五所収。黄錫珪の説は『李太白年譜』(作家出版社 一九五八年 北京)所収。詹鍇の説は『李白詩文繫年』(作家出版社 一九五八年 北京)所収。
- (2) 安旗・薛天緯『李白年譜』(齊魯書社 一九八二年)二六頁や郁賢皓『李白丛考』(陝西人民出版社 一九八二年)中の「李白与孟浩然交游考」。
- (3) 陳貽焮『孟浩然詩選』(人民文学出版社 一九八七年 北京)二七頁。開元十八年頃に繫年している。
- (4) 『李太白全集』卷一四「春日歸山寄孟浩然」の王琦注
- (5) 『李太白全集』卷三六に引いてある『江南通志』と『一統志』の記事。
- (6) 中国方志叢書『漢陽縣志』に「太平興國寺、在城北蓮花隄西、唐建、原名大別寺。」とある。
- (7) 『入蜀記』卷五、八月二十八日の条。
- (8) 『湖北風物志』(湖北人民出版社 一九八五年)の三二頁。
- (9) 『李太白全集』卷二一
- (10) 『李太白全集』卷二〇「泛沔州城南郎官湖」

- (11) 注(8)の二九頁
- (12) 『中國旅遊圖』(帝國書院)に基づいて作成した。
- (13) 注(8)の三〇頁
- (14) 兩宋本、繆本題下俱注云：江夏、岳陽。咸本無黃鶴樓三字。敦煌殘卷之廣陵三字作下惟陽。絕句本作送孟君之廣陵。
- (15) 宋咸淳刊本『李翰林集』
- (16) 明陸元大刊本『李翰林集』
- (17) 黃丕烈校繆曰芭刊本『李太白全集』
- (18) 唐代研究のしおり『李白の作品資料集』(同朋出版社 一九七七)
- (19) 唐代研究のしおり『李白歌詩索引』(花房英樹)
- (20) 『李太白全集』卷二一「望夫山」に、「顛望臨碧空 怨情感離別」とあるのが唯一。
- (21) 「碧山」は一八例、「青山」は二一例ある。(小山工業高等専門学校)